

The Nice and the Good を力の行使の視点から読む

内藤 亨 代

この小説は法律家ジョン・デュケインが或る事件の真相解明を委ねられ、任務を遂行するうちに今まで抱いてきた自己認識の誤りに気づいていく過程を描いている。デュケインは人に対して力を振るうことに嫌悪感を持ち、極力避けてきた。しかし人と人との交渉には必ず何らかの力のやりとりが生じる。まして事件の解決には当然力の行使が要請される。この小説の中心の筋は、デュケインがいかにして正しく力を行使できるようになったかをたどるものである。

事件の真相に近づくにつれてデュケイン自身も事件に巻き込まれる事態となり、思いも掛けない方向へ進展していく。これまでデュケインは高潔な、正しい人と周囲から尊敬され、自分でもそう自負してきた。しかしその自画像は次第に崩れ、自分は決して善くも正しくもない人間なのだと悟っていく。事件の決着として一人の人間の処遇を決定しなければならなくなって苦慮しているとき、水難救助に赴いて自分も死に直面する。死の下に自分の生を見返したデュケインは、死の前には人は平等であることを知って、そこから他者を発見する。救助の後、デュケインは処遇を決定した。法を犯した事実を見逃すことはしないが、法の厳格な適用も求めなかった。その人間に新しい生を歩み始めるきっかけを与えたのである。デュケインは正しい自己認識を得たことと死に直面したことによって、力を自分を誇示するためではなく、正しく行使できるようになった。

さて、最終章にテオ・グレイの長い内的独白が置かれている。テオはデュケインの物語では最も周辺に位置する。テオはインドにいたとき出家し

たが事件を起こして帰国した。それから長い年月をかけてテオは自分の過ちの意味を悟っていく。

テオは自分の内にある巨大な空白に気づく。その飽くことを知らない空白が無限な自己拡大を要求し、それが他者へ向かうとき愛の顔となる。それは当然恐るべき力として働く。テオは僧院への帰還を決意する。自分の内にある力を僧院に預けることにしたのである。

テオの視点からデュケインの世界を見るとどう映るのか。テオは「人は人に対する狼だ」と酷評している。デュケインは自分の内に巨大な空白があるとは感じていない。自分の力はコントロール可能なものとして自覚されているから、その使用の仕方が問題となる。テオの場合は自分の存在そのものが凶暴な力として捉えられている。マードックはデュケインの世界を決して批判的に描いてはいない。しかしテオの視線はそれを全体として見渡させる。するとそれは単にデュケインの自己発見や幾組かの幸せな結合の物語ではなくて、この世だけで完結する生の限界を露わにしてみせるのである。

さらに物語の最後は9歳の子どもたちの姿で締めくくられる。純真で無垢で、同時に全く無力な子どもたちだけに見える空飛ぶ円盤がある。それは人間界に何ら介入せず、子どもたちは何かを願うことさえせずに、ただ見ている。それが善そのもの、或いは善のアイデアを示していることは疑いないが、それを見ることができる子どもたちも、本当にはこの世に属していないと言えるだろう。

デュケインはこの現実の世界で力を正しく行使することを学んだ。テオは自分の中の凶暴な力を

僧院に預けた。この世での力の放棄である。さらに子どもたちは力を持たない存在を呈示している。私たちは10年後の *Nuns and Soldiers* におい

て、力の行使がもっと鮮明に描かれ、力の放棄がもっと自覚的な内的検討を呼び起こしているのを見出すだろう。